

# ホスピタルリーチ・プロジェクトのエスノグラフィ

— 組織をつなぐ異文化コミュニケーション —

Ethnography of the Hospital-reach Project:  
Creating cross-cultural communication among institutions

村田麻里子\* Mariko Murata

## 1. 序

組織を組織たらしめているのは、どのような構造か。その構造は、社会においてどのような関係性や影響をもつのか。これはメディア論の本質的なテーマのひとつである。本稿は、組織間の異文化コミュニケーションを主眼とする実践研究により、その問いに取り組む。具体的には、ミュージアムと病院という異文化をもつ組織同士をつなぐことによって、それぞれの組織と社会の回路をつくり、そのプロセスから構造的に浮かび上がる組織のエスノグラフィにせまる。

ミュージアムと病院を連携させることで、社会から「閉じた」<sup>1</sup> 組織同士をつなぎ、それぞれ社会との回路をつくる。そんな発想から、2002年、当時修士2年の塚瀬三重と共にホスピタルリーチ・プロジェクトを立ち上げた。ホスピタルリーチは、コミュニティに向けてサービスを提供することを意味するアウトリーチ(outreach)をもじった造語である。博物館では自らのコレクションやそのレプリカを使用し

た移動博物館や出前授業のような館外での活動をアウトリーチと呼ぶことが多い。今回の実践は、ミュージアムスタッフが病院に赴き、館の資源を活用したワークショップを院内で実施することで、患者の病院におけるQOL(クオリティ・オブ・ライフ)<sup>2</sup>の向上をめざすというプログラムであることからこのような名をつけた。我々はファシリテータ兼コーディネータとしてミュージアムと病院の間を頻繁に行き来し、そのコミュニケーションを媒介するという役割を担った。したがって本研究は、組織をつなぎ異文化コミュニケーションをめざす実践であると同時に、フィールドワーク的要素を多分に含む。

ホスピタルリーチはまた、いくつもの位相をもつ実践である。一義的にはミュージアム研究や病弱教育研究でもあり、より広くは大学と社会、研究と実践、理論と実践の関係性を捉えなおし、組み替える実践活動でもある。本稿では、そうしたプロジェクトの多元性、複合性をダイナミックに描き出すことを試みる。したがって、

\*東京大学大学院学際情報学府

キーワード：異文化コミュニケーション、社会との回路、組織、ミュージアム、病院

プロジェクトの内容全てを仔細に述べることは、本稿の目的ではない（個別のワークショップの

成功に関しては敢えて触れない）<sup>3</sup>。

## 2. ホスピタルリーチ・プロジェクトの射程

### 2.1 プロジェクトの目的

ホスピタルリーチ・プロジェクトは、ミュージアムと病院という異文化をもつ組織同士をつなぐことによって、それぞれの組織と社会の回路をつくらうという趣旨のプロジェクトである。独自の文化を有す各組織は、異なる目的意識をもってこのプロジェクトに参加する。我々は病院や院内教育機関<sup>4</sup>に関する下調べとインタビュー調査を経て、以下のような複合的な射程をもつプロジェクトを立案した。

- 病院や院内教育機関と連携することで博物館の活動の枠を広げ、社会における新たな回路作りを行う。
- 院内の患者たちが普段接する機会の少ない博物館の活動や資源とじかに触れる機会をつくることで、自己表現や生きる意欲へとつなげるきっかけを与える。
- 回路作りを通じた社会のノーマライゼーションを目指す。患者が外部と接触することで得られる効果と同時に、博物館関係者が患者と接触することで得られる効果に注目する。

### 2.2 プロジェクトの背景：メルプロジェクトとメディア・プラクティス

ホスピタルリーチ・プロジェクトの背景には、東京大学大学院情報学環メルプロジェクト（以下メル）の存在と、メディア・プラクティス

- 組織間の異文化交流をめざす。

すなわち、博物館側からみれば、公共サービスの拡大とそれによるアカウントビリティという論理になり、病院側からみれば、QOLの向上と社会のノーマライゼーションという論理に、そして院内教育機関側からみれば子供たちの学ぶ意欲の喚起と授業の質の向上という論理になる。そしてメタレベルでみれば、それぞれの組織の社会との回路作り、異文化コミュニケーションという大きな目的がこのプロジェクトに内在する。

こうしたプロジェクトの立ち上げにあたっては、看護学を専門とする塚瀬の視点と、博物館学及びメディア論を専門とする筆者の視点が不可欠であった。当然、二人の問題意識もプロジェクトの捉え方も異なり、塚瀬は院内の児童らのQOLの観点から、筆者はミュージアム（や病院）と社会との関わりという観点から主に意見を出し合い検討した。我々はむしろこれらの複合的視点や要素を敢えて統合する必要はないと考えた。

（メディア実践）という考え方がある<sup>5</sup>。MELL Project (Media Expression, Learning and Literacy Project) は、メディアに媒介された

「表現」と「学び」、そしてメディア・リテラシーについての実践的な研究を目的とした、ゆるやかなネットワーク型の研究プロジェクトであり、そうしたメディア表現や学びの営みをどのようにして展開していくかを考えるいくつもの実践研究を行っている<sup>6</sup>。それらの研究を方法的に支えるのは、メディア・プラクティスというアプローチである<sup>7</sup>。研究者自らが実践に着手し、メディア関係者や現場と組んず解れつして、ある状況を組み替えていくような研究をしていくことを意味する。当然そこには実践と理論の往復運動が必要になる。水越伸は、このアプローチを、「たんなる研究対象、素材であることにとどまらず、研究者自体が自ら積極的に介入してすすめる学問的方法論の一つであり、メディアの理論研究、歴史研究、実証研究と相関してすすめられる、相対的に独立した新たな知的営みをはらんでいる<sup>8</sup>」と位置づける。すなわち、研究者は従来の傍観者的なスタンスではなく、自らも現場と関係性を持ち、それに責任もつ形で関わっていく方法である。水越の指摘するように、これはジェイムズ・クリフォードの批判的人類学<sup>9</sup>や、ガヤトリ・スピヴァックのポストコロニアリズム<sup>10</sup>など、自らの立ち位置に意識的・批判的なまなざしを向けて行う研究と共通している。ホスピタルリーチも、そのような研究方法をとっている。その意味で、エスノグラフィでありながらも、従来のそれを越えた枠組みをもつ。

ところで、筆者はメディアとしてのミュージアムの研究に、実践と理論の両方から取り組んできた<sup>11</sup>。メディアという視点からのミュージアム研究は、日本では梅棹忠夫、イギリスではロ

ジャー・シルバーストーンやアイリーン・フーパー・グリーンヒルらの研究<sup>12</sup>などが散見されるが、体系的な研究としては全く確立されていない段階である<sup>13</sup>。さまざまなモノや情報や人の行き交うミュージアムを情報媒介装置、すなわちメディアであると捉え、そこにどのような空間や言説が構築されていき、それが社会とどのように関わっているのかを研究していくことは、ミュージアムという組織の構造を明らかにしていくうえで重要である。現在のミュージアムは近代的な枠組みの色濃い組織ではあるが、その構造は近代に至るまでの歴史をも同時に背負っている<sup>14</sup>。それはさまざまな歴史的経緯の結果として存在する。言い換えれば、歴史が異なれば別のかたちにもなり得たのであり、今からでも別のかたちになりうる可能性をもっている。そうしたミュージアムの「可能的様態<sup>15</sup>」を考えていくには、ミュージアム構造を可視化させていく作業が不可欠である。しかし、従来のミュージアム研究は、今あるミュージアム構造を自明のものとして扱ったうえで、細かくジャンル分けされ、分節化された研究を主にしてきた。

ミュージアムの可能的様態の検討、すなわちミュージアムをミュージアムたらしめている構造を明らかにするひとつの重要な契機が、異文化コミュニケーションなのである。組織間をつなぐことで、自明とされていた構造が異化され、顕在化する。もちろん、これは病院についても同じことが言える。ミュージアム、病院、学校、大学、メルという組織が重なり合うホスピタルリーチで、組織の異文化コミュニケーションが大きなテーマとなるのはこのような背景からである。

ところで水越は、マイケル・ギボンズの科学技術論における「知の生産のモード」<sup>16</sup>の考え方を援用し、メディア論は「単一の専門家集団でなく、市民、産業界の現場の人々、行政担当者、そして異なる領域の専門家など、多様な領域の人々が関わり、学際的、越境的な問題枠組みの設定をしていくこと」<sup>17</sup>が前提とされる「モード

### 2.3 「組織体」を束ねる価値体系

本稿ではミュージアム、病院、大学、学校などの組織(institution)を、大きな価値体系やコンセンサスを共有する塊として、仮に「組織体」と呼ぶことにする。すなわち組織体は、その組織独特の「知識」や「知恵」を数多く内在化させており、そうした言語化されないコンセンサスを束ねている統一体である。エティエンヌ・ウエンガーらは、専門的な知識は暗黙的な場合が多いことを指摘する<sup>18</sup>。ミュージアムや病院が、本来社会に埋め込まれた存在でありながらも「閉じた」組織となっているのは、組織の専門性及び特殊性から、自己完結したシステムを確立しており、組織体としてのまとまりが強いことに起因する。そして、束ねられたコンセンサスを支えているのは、実は組織を無意識に貫く漠然とした価値観であることが多い。たとえばミュージアムでいえば、「コレクションの保存」「パブリックな博物館」<sup>19</sup>などがそれにあた

### 2.4 本稿の構成

今回のプロジェクトでは、3回の実践が行われた。はじめの2回は、全く同じ連携相手で行われ、組んだ院内学級もミュージアムも、ともに東京大学敷地内にある（仮に東京実践と呼ぶ）。

2」の知であると指摘する。すなわち、メディア論とは本来なら、社会と回路をもち、社会的な文脈に位置づけられるべき研究なのである。ミュージアムがメディアである以上、ミュージアム研究も狭い博物館学の領域を抜け出て、社会に埋め込まれた風景をきちんと捉えられる研究であるべきではないだろうか。

り、病院では、「治療」と「延命」<sup>20</sup>であろう。こうした価値観を自明のものとして組織体は動いており、それが問い直される機会はほとんどない。ホスピタルリーチは、交流を通じて組織体同士が交わり、ぶつかることで、内在的な知識やその背後の価値体系、ひいては組織を組織たらしめている構造を顕在化させる実践である。

ところで、ウエンガーらによれば暗黙知は「複雑で相互依存的な物事の本質に対する深い理解」であり、それは「相互交流やインフォーマルな学習プロセス」<sup>21</sup>により共有できるようになるという。しかし、暗黙知とは言い換えれば身体化された知識であり、それを脱身体化、脱コンテクスト化、あるいは異化することの困難さが、異文化コミュニケーションの最大の焦点なのである。本稿では、そうした異分野交流の諸相を描き出してみる。

3回目は、長野県にある養護学校と東京のミュージアムとの連携をはかった（長野実践と呼ぶ）。組織のエスノグラフィを描き出すことを目指す本稿は、ややクロノロジカルに記述がなされる



点は否めないが、おおまかにいって、東京実践の報告では病院側の話を、そして長野実践の報告では、ミュージアム側の話を中心に考察する。

### 3. 東京実践：病院を中心に

#### 3.1 東京実践の概要

実践の第1号は、東京大学キャンパス内にあるミュージアムと病院に焦点を当てた。東京大学総合研究博物館（以下、東大博物館）と、東京大学医学部附属病院内の東京都立北養護学校東大こだま分教室（以下、こだま分教室）の連携は、同じ東京大学敷地内にありながら全く交差することのないふたつの組織をつなぐというプロジェクトであった。実践は2002年12月19日に「こだまの時間」という「総合的な学習」の時間を利用して行われた。東大博物館の西野嘉章教授がこだま分教室に館のコレクションを持参して赴き、「ダイヤモンドってなんだろう？：文化と環境の視点からその魅力を探る」というテーマでワークショップを実施した<sup>2)</sup>。

こだま分教室は、東京都立北養護学校<sup>3)</sup>に属し、東京大学医学部附属病院内（以下、東大病院）に分教室という形で設けられている院内教育機関である。したがって、院内にありながら、病院とは別組織であり、むしろ病院内の「学校」という存在である。子供たちは地元の学校から学籍を移し、転校という形で入院中に在籍する。教員は2002年には8名、生徒は小学部・中学部・高等部あわせて月間平均15名の病気療養児が在籍している<sup>4)</sup>。

我々は、院内で安定した基盤での実践を望んでいたため、こだま分教室という「学校」を実

それぞれ病院、ミュージアムそれぞれの組織体の体質が浮かび上がるような記述を心がける。

践の場に選んだ。とはいえ、こだま分教室を構える東大病院は、高度な医療技術を提供する大学病院であり、こだま分教室に在籍する子供たちも悪性新生物をはじめとする重い病気が多い。ゆるやかな病状をもつ子供たちが通う院内学級も他の病院には存在する中、今回の場の設定はハードルが高いことは当初から予想された。しかし、我々は、同じ敷地内にある接点のない組織、という点にこだわった。また重病だからといって、学校に時々ではあれ通える子供たちに、博物館資源を活用できないはずはない。東大博物館は、歴史的にも貴重な大学の研究資料を資源として持っている。それらの資料と接することは子供たちを社会と結びつけ、闘病の意欲にもつながるかもしれない。

ところで、一般にミュージアムの連携相手としては、常に学校が想定されており、博学連携の実践は最近日本でも増えている。しかし、こうした院内学級や養護学校は、その対象として抜け落ちている場合がほとんどである。今回そこに敢えて着目することで、ミュージアムと社会との回路作りに新しい局面をもたらすことができるのではないかという筆者らの思いがあった<sup>5)</sup>。その一方、ミュージアムとしては比較的オーソドックスな、ワークショップの持込みという方法を選ぶことで、ハードルが高くなりす

ぎないように努めた。

### 3.2 せめぎあう組織体

実践にこぎつけるまでに、我々はこだま分教室と東大博物館の間を何度も往復しながら話を進めた。塚瀬が以前東大病院で看護婦として働いた経験をもち、筆者が東大博物館で研究を行っていたことに取っ掛かりを得、まずこだま分教室に見学を申し込むところから始まった。見学の許可申請をし、見学と面談を経て連携の提案をし、実施枠をもらい、プログラムの実現にこぎつけるまでの道のりは決してスムーズではなかった。我々のインフォーマントとなってくれたのは、見学当初から窓口になってくれた土屋忠之教諭である。土屋教諭は、教室の他の先生方に、タイミングを見計らいながら話を小出しにし、そこに立ちほだかる幾重もの壁を牛歩の歩みで少しずつクリアする方法をとった。おそらく外部とこのような連携をしたことがなく、プライバシー保護に敏感な分教室にとって、すべて一気に話す警戒される恐れがあると判断したためである。そのため、ギリギリまで実施の目途は立たなかった。さらに、行政レベルでの組織構造があった。こだま分教室は、東京都立北養護学校の分校である。したがって、管理職は院内には常駐しておらず、このような外部から持ちかけられた話を本校に通す際に、我々→土屋教諭→こだま分教室の教員→養護学校(本校)と、伝言ゲームようになる。

こうした難しさの要因は根本的にはどこからくるのか。まず、病院内の学校、という組織体の入れ子構造があったという点、そしてそれぞれの組織体が独自の価値体系を色濃く持ちあわ

せていた点、そこへ参入しようとする我々もまた、大学、ミュージアム、という組織体として堅固な背景を持っていたという点。すなわち、ミュージアムと学校、学校と病院、大学と学校、など順列組み合わせながらさまざまな組織体は何通りにも拮抗しあう場がそこに生まれたのである。

たとえばミュージアムと学校という関係ひとつとってみても、簡単ではない。学校を支えるのは、授業という単位である。学年ごとの授業計画は文部科学省の学習指導要領に基づいて組み立てられている。したがって、学校で博物館のワークショップを行おうとすれば、必ずワークショップ自体を授業の内容に沿うように設定することを求められる。博学連携は、日本のミュージアムでは最近活発に取り入れられる傾向にあるが<sup>26</sup>、実は学校と博物館を唯一結ぶものは、授業という枠組み以外になく、制約は少ないのが現状である<sup>27</sup>。授業という枠組みを越えた連携は、現在では想起されにくい。(それでも敢えてこうした枠組みで実践を行った理由は後述する。)

我々はある程度内容に融通のきく「総合的な学習」の時間での実施をお願いしたが、この時間とて、こだまの年間計画に基づいて行われているものであり、それを中途から利用させてもらうことは、その流れにきちんと沿うプログラムを我々が提示することを意味した。回路作りの仕掛けをより多く作ろうとする我々とは裏腹に、先生方は授業内容の精度や手順を何度も我々

に要求した。我々は先生方がこの実践を「こだまの時間」に無理矢理ねじ込んでくれたことに心から感謝しつつも、狭い授業枠に閉じ込められていくことでプロジェクト本来の意図が徐々に失われていくような感にとらわれた。

しかも、こだま分教室は単なる学校でない。それは「院内教育機関」という病院と抱き合わせで考えていかなくてはいけない組織体である。たとえばビデオレターの交換など、「こだまの時間」外で行えることで、かつ交流に重きを置いたプログラムをいくつか提案したが、病気療養児らのプライバシーを理由に見送られることとなった（ビデオレターはこちら側からのみ届けることで合意した）。さらに、我々が相互に話し合いを進め、ようやく実施の目途がたち、プログラムも最終決定した頃に、初めてベッドサイド授業しかできない子供にも同じ内容ができなくてはならない、という話が先方からあった。そこでベッドサイドの授業をこちら側でさせてもらいたいと申し出たが、難しいとのことだった。少しでも手間のかかるプロセス（保護者や病院への承諾を得るなど）が必要になるなら実践自体が中止になりかねない雰囲気は当時のこだま分教室内にあり、土屋教諭と我々はそこに話がいかないように細心の注意が必要だった。しかし、ミュージアムのコレクションを用いながらの学芸員のトークは、果たしてベッドサイドでどのように代行できるのか。最終的には、東大博物館の好意でコレクションの現物を貸し出すことを認めてもらい（作品の安全性を担保しているのは信頼関係のみである）、こだま分教室の教員がベッドサイドでそれらを見せることに落ち着いた。むしろベッドサイドこそ

が当時こだま分教室の授業の基本となっていたことが後になってわかったのだが、これが当初からわかっていたら、我々も若干異なる枠組みやプログラムを提案していただろうと思われた。ベッドサイド授業は、内部にいる教員にとってはひとつのコンセンサスであるため、それを共有しない我々に向けて、内在的な「知識」を外部化するという行為が想起されえなかったのであろう。

同様のことは、我々の側にもいえる。それは「ホスピタルリーチ」という極めて博物館学的な視点からのネーミングにも表われていた。ミュージアムの論理に従えば、今回のようなアウトリーチは、公共サービスの一環として歓迎されるべきものであり、それが入院している子供たちや院内学級のためになるというのは、わざわざ問いなおす必要のない事実であった。また東大博物館は、大学博物館という組織上、学芸員ではなく研究者によって運営されている。展示の企画構成などもすべて研究者が行っており、常に新しい試みをしようという大学博物館ならではの気風がある。今回博物館側に当初から何の躊躇も抵抗もなく我々のプロジェクトに賛同を得られたことは、普通のミュージアムならめったにないことなのである。その結果、東大博物館と我々はほぼ一体化した組織体となり、我々は極めて博物館的な視点から病院へアプローチすることになった。繰り返せば、博物館のスタッフが患者の子供たちと交流をするという企画は、院内学級にとってもよいことだ、というアプローチである。

しかし、こだま分教室の先生方は慎重な姿勢を示した。先生方の心配は、プライバシーの保

護にあった。言葉の端々から子どもたちがモルモットになるのは困るといったニュアンスが伝わってきた。また、抗癌剤の投与で頭髪がないことなどで外の人に笑われるかもしれない、下手なことをして傷つけないよう配慮してほしいとのコメントもあった<sup>28</sup>。そこには、病気療養児たちを懸命に守ろうとする先生方の姿があった。治療の副作用に耐えながら院内で暮らしている子供たちを目の当たりにしている先生方の痛々しいまでの心遣いである。しかし、このように傷つけないという人間としてごく自然な欲求が、結果的に子供たちを外界から遠ざけてしまうことが起こりうる。知らず知らずのうちに外界と徐々に切り離されていくことで、そのように外部と内部を線引きする構造が、「病院」「院内教育機関」という組織を通じて内からも外からも強化されてしまう。

先生方が慎重だったもうひとつの背景には、病院における研究や実験のカルチャーがあった。大学病院の医師は自ら大学の研究者であり、臨床結果がそのまま医師の論文につながることも少なくない。まして東大病院といえば、国家が集中的に資金を投入し、最先端の技術を導入しており、それを利用した難病への集中的な治療

### 3.3 大学という組織体のなかで

ところで、病院という組織で優先されるのは治療であり、治療に関係ないものは、排除されていくという構図がある。実は、こうした構図を踏まえて、我々は敢えて院内でも院内教育機関、すなわち「学校」という、通常社会において権力を持つ組織に着目したのだった。治療を理由に押し出されない枠組みを確保しておきた

と研究が行われている機関である。先生方が慎重だったのは、大学の研究に対するこうしたイメージからであろう。

こうした院内での価値観を十分認識していなかった大学院生二人（我々）が、博物館的視点に根ざしたプロジェクトを、大学院の「研究」の一環として行いたいと申し出たところから、そもそも課題は山積みだったのである。しかし、我々はむしろ病気療養児と外部のコミュニケーションの場があることが、お互いの存在を理解し、自然化するのに最適な方法だという自分たちの考えを不器用に訴えた。こうして話し合いの中でお互いの組織体を侵食しあい、跳ね返しあいながら、徐々にプロジェクトが進行していった。

ちなみに、このプロジェクトが、子供たちがミュージアムに出向くという趣旨のものであれば、事は比較的簡単に進んではずである。しかし、それでは我々の意図は実現しきれない。病院という一種の「アジュール」<sup>29</sup>に外部の空気が入り込んでくることにこそ、異文化コミュニケーションが生ずる契機が存在する。それはすなわち、病院の論理に覆われた空間に異物として入り込むことを意味した。

かった。したがって、ホスピタルリーチが結果として学校、病気療養児という対象をもったことは、こうした組織上の問題を見越してのことだった。ところが、その学校という枠組みすら、大規模かつ集中的な治療を行う東大病院では押しだされがちなのが現状であった。こだま分教室は、学校という義務教育の枠組みによってか

ろうじて存在理由を認められていながらも、病院という空間において物理的にも認識的にも病院関係者のなかで決して大きいとはいえない存在なのである。そうした病院と院内学級のせめぎあいが、実は日々の活動のあちこちで起きていることが、教室に足を運んだり、教員とのやりとりをするうちにわかってきたのである<sup>30</sup>。授業も、治療があるとなれば、当然休むことになる。病院側はある程度配慮はしてくれるとのことだったが、治療が何よりも優先されている事実は明らかだ。それは当たり前だと一掃されてしまっただろうか。また薬の副作用による頭痛や、白血球の数値によって、授業に出てこられないことはよくある。先生方の「来られないことが基本になっている」<sup>31</sup>という言葉からも状況がわかる。一方で子供たちも「今日は具合が悪い」とあまり教室に来たがらず、半分言い訳のようにもなってしまうようだった<sup>32</sup>。

子供たちの教育を仕事とする教員らにとって、子供たちが授業に出てこられないことが常となった状況に、落ち込むこともあるだろう。しかし、治療という子供やその家族にとって人生の一大事を目前に、それすら彼らは声に出すことができない状況にあるのではないだろうか。

さて、我々は東大病院内のこうした内部のせめぎあいに当初あまり敏感でなかった。どちらかといえば、異なる組織と認識しておきながらも、東大病院とこだま学級、医師と教員を同一視し、そこからミュージアムと病院を想定してきたのだ。そして、我々は、ミュージアムという枠に無意識に自らを位置づけていた。実際、ミュージアム側は我々の趣旨に全面的に賛同し

ており、プログラムを我々がミュージアム側と折衝しながら院内学級に提示し、それを調整していくという構図自体も、我々がミュージアムと一体であることを示しているに他ならない。

さらに、「大学博物館」という呼称が示すとおり、やはりミュージアムといえども大学の一部である。そうした意味で、ミュージアムと病院をつなぐというプロジェクトは、はからずも「大学」と、大学病院の論理に押しつぶされそうな「学校」をつなぐ、という構図をもっていたのだ。組織体の関係性は、我々が当初思い描いていたものよりずっと複雑に絡まりあっていた。同じ敷地内にありながら交差することのないふたつの組織をつなぐという目的を掲げた実践は、全く予想しない仕方で、しかし確かに、大学という組織体を考え直す作業を意味したのだ。

このように、ワークショップ自体の成功とは異なる次元と場所で、さまざまな構造が見え隠れしているのであるが、今までのようなワークショップの結果報告からは、こうした経験が全く記述されないままである。今回組織のエスノグラフィというひとつの方法を示した理由はここにある。

さらに、今回の実践では、研究としての体裁や調査方法が課題となった。大学における研究は、当然ながら実践記録が必要になる。そのためには、アンケートやインタビューは必須であるし、なるべくであれば、実践自体の記録を残したい。しかし、記録のための撮影はプライバシーの観点から許可がおりず、また病気や治療という身体的負担のある状況下で、事前・事後アンケートなど、体系的な調査は難しい。先生



方も多忙だということで、こだま分教室の先生方全員には事後アンケートをお願いし、「こだまの時間」を担当する3人の教諭には、フォーカスグループでの事後インタビューをさせてもらった。我々は、先生方のアンケートのみならず、実際に参加した生徒からの声を聞きたかつ

### 3.4 東京実践2号とその後

第1回目の実践から半年後2003年7月に、第2回目の実践が行われた。2年目は、当初尽力して我々の実践に道を開いてくれた土屋教諭が移動になり、吉田讓教諭がかわりに窓口となった。初回の実践では塚瀬と何度もこだまの分教室に足を運び、顔をみせ、そうすることで信頼関係を構築していく必要があった。しかし、2年目ということで試みはあっさり認められた。当然吉田教諭の積極的な関心が一番の要因だが、前回の実践例があることから、その他の先生方にも我々が何をやるかがイメージでき、また博物館という場所に対してリアリティをもつことができたことも大きい<sup>39</sup>。同時に、こだま分教室の先生方が、我々の実践の意味をある程度理解してくれたことも意味していた。

今回は東大博物館の佐々木猛智助手がワークショップを実施した。実践は2日間にわたって行われた。1回目は新聞記者になったつもりで、貝の研究をしている佐々木先生に取材をし、それをもとに記事を書くというもので、ここでは生徒が自ら書く記事のために質問を考えなくてはいけないというものである。これはのちに新聞の形に我々がまとめ、東大病院にあるこだまの展示スペースに張り出した。2回目は、モノ(貝)をよく観察するという目的で、自ら選ん

た。しかし、体の負担になるということで、代わりに授業での作業に今回の授業評価を埋め込む形でワークシートを作成した。このような研究において、精度のあるしっかりしたデザインの調査結果がなければ研究と言えない、という現在の研究観が問われるべきであろう。

だ実物の貝をスケッチし、それを最終的にはアイロンプリントでTシャツにした<sup>40</sup>。

終了後、吉田教諭は東大博物館と今後もこうして継続的な関係を結びたいと言ってくれた。これは、本来なら我々が手放して喜ぶべき、こだま分教室からの積極的な連携の申し入れであった。しかし、その年既に塚瀬は修士課程を修了し社会人となっており、筆者は2ヵ月後から1年間日本を離れなくてははいけなかった。仮に書類で東大博物館との連携が合意されても、我々がいなければ東大博物館とこだま分教室の間を行き来し、微調整をする人は誰もいない。コーディネータなくして今回のようなかたちでの連携は実現困難だ。だとすれば、我々は自分たちから仕掛けておきながら、吉田教諭の期待に応えていくことができないことになる。

ここには少なくとも2つの問題点があった。ひとつは、このような連携形態(ミュージアムによる院内へのアウトリーチ)が我々のようなコーディネータの存在なくしてなかなか実現しきれないという事実である。もうひとつは、大学の研究の在り方に関係する問題である。

まず、前者であるが、本来なら我々が構築したパイプをこだま分教室と東大博物館でそのまま維持していくのが望ましい。しかし、学校の

教員もミュージアムのスタッフも、日常の業務に忙殺されているのが常である。子供たちがミュージアムを訪れるのではなく、ミュージアムスタッフが病院を訪れるという連携形態を実現していくには、院内のさまざまなハードルをクリアしたり、日程を調整したり、授業とワークショップを摺り合わせる調整役がいなければ、安定した実践は行えない。今回こうした連携形態をとった理由は既に述べた。この方法が連携の核心に迫るものであることは実感しているものの、実現性やシステム化という点は、まだ解決していないのである。

一方大学の研究の在り方については、実践研究を行っている研究者ならおそらく一度はぶち当たるであろう壁だ。それは、パイロット研究の先駆性と、プロジェクトの継続性という問題である。このプロジェクト立ち上げのためにいくつかの施設を見学してまわった折、ある院内学級の先生が、通常の学校との間でテレビ会議を行った研究者がいたことに言及し、「研究者の人たちが実験だけして、機器もろともサッサと引き上げていく」と我々に語った。アカデミズムは、パイロット研究という価値観で動いている。パイロット研究においては、社会でさきがけとなるような研究を切り開いていく役割を研究者が担い、そこでは継続性よりもむしろ先駆性が重視される。その研究によって新しい流

れをつくりだす契機とすることをめざしている。しかし、今回のような病院や院内学級を足場にして行う場合、関係者にとっては、実践を「実験」と区別するのは、その継続性である。彼らの日常に介入した後で、即座に引き上げれば、そこには今までと変わらない日常が待ち受けているだけである。そうなれば、当然利用されたという気持ちが強くなる。我々もテレビ会議を一度行って引き上げていく研究者と大差がないのではという自責の念に駆られた。

しかし、その後この論文を提出するにあたって1年半ぶりに吉田教諭に連絡をとって見たところ、筆者の不安をよそに、吉田教諭は前向きだった。こだま分教室もだいぶ風通しがよくなって生徒も教室に出てくるようになった、今後もゆっくりでよいから何かやりたい、期待している、とかえって激励の言葉をもらった。こだま分教室のホームページ自体もオープンな雰囲気になり（生徒の顔がはっきりしない程度の写真が公開されるまでになった！）、吉田教諭の努力が目に見えて伝わってきた。連携のシステムをつくる必要性と、システムの硬直化の弊害のこともよく理解しているようだった。さしあたって、こだま分教室と東大博物館の連携システムをなんとか出来ないかをゆっくり考えていこうと確認しあい、電話を切った。筆者とこだま分教室との連携は今後も続く。

## 4. 長野実践：ミュージアムを中心に

### 4.1 長野実践の概要

東京実践を糧に、「大学」という枠はずした連携を行えないかと考え、次の実践を計画し

た。連携先は、筆者自身が属しているメルプロジェクトのメンバーの関係している2機関、長

野県寿台養護学校（以下、寿台）と日本科学未来館（以下、未来館）であった。今回は、長野県松本市にある寿台に、東京から未来館のスタッフ3人が我々とともに赴き、ワークショップを行う。塚瀬が修士過程を修了・卒業していたため、メルメンバーは、筆者と林直哉の2名となった。コーディネイト段階では、自身未来館スタッフであるメルメンバーの境真理子が関わってくれた。

いずれも組織の規模がはるかに前回より大きいことから、寿台には当時PTA会長をしていた林が、未来館には境がそれぞれ話を持ち込み、ある程度の承諾を得た。そのうえで、筆者は林と長野県へ向かい、今回のインフォーマント役である常盤貞夫教諭や塚原明水校長先生と話をし、正式な許可をもらった。一方未来館での調整（許可及びメンバー選び）は、境が担当した。そのうえで、筆者も館に赴き、企画の意図を伝え、今回のスタッフとなる科学技術スペシャリストの小川陽子氏と島田卓也氏と話をした。島田氏はメルプロジェクト側の趣旨は理解しつつも、未来館として今回の実践をやる意義を考えているようだった。重要なことに思われたので、筆者も電話で何度か突っ込んだ話し合いをし、最終的には実践に参加してくれることになった。

日本科学未来館は2001年にオープンしたお台場にある科学館である。ここで、2003年3月19日から6月30日まで、時間についてさまざまな

#### 4.2 組織体の三角関係

東京実践と今回の長野実践の大きな違いは、ミュージアムがメルとは全く異文化の組織体であったことである。すなわち、東京実践では、

観点から考える展示『時間旅行展』が行われ、それに付随して未来館の科学技術スペシャリストらの開発したワークショップが行われた。今回はそれらを応用して寿台に3日間にわたる時間のワークショップを行い届けることになった。

長野県寿台養護学校は、隣接する国立療養所中信松本病院に入院・治療しながら通う病弱養護学校である。松本市街から少し離れた寿台は、普段から生徒たちに陶芸をさせたり、ピオトープをつくらせたりと、多くの活動を取り入れた活発な活動をしている。また筆者自身参加させてもらった運動会も、病弱養護学校にもかかわらず、生徒を走らせたり、運動させたりと、子供の症状に応じてギリギリまで挑戦させる意欲的な学校だという印象を受けた。

寿台に通う子供たちは当時小学生から高校生まであわせて16名だった。そのうち、全員が3日間で来たわけではないが、1日平均7人程度の子供たちと<sup>35</sup>、付き添う先生（2人の生徒につき1人～ほぼ同数）が参加した。子供たちの症状は、こだま分教室とは異なり、慢性的なものが多い。たとえば喘息持ちで埃のたつ作業が困難な子供、集中力が持続しない子供、手の震えがあり細かな作業が出来ない子供、糖尿病のために低血糖になる可能性がある子供、視野狭窄や聴力の弱い子供など、あらかじめ症状を把握したうえで、ワークショップの内容を未来館と練った。

組織体同士の複雑なせめぎあい明らかになりつつも、大枠では病院サイド（東大病院とこだま分教室）とミュージアムサイド（メルと東大

博物館)という相互関係の図式で物事が進んだ。今回は、養護学校(病院)、ミュージアム、大学といういわば三角関係になった。そこで長野実践では、ミュージアムという組織体を中心に、三組織の関係性を照射してみる。

今回寿台と我々をつなぐために手を尽くしてくれた常盤先生は、事後アンケートに多くの有意義なコメントを残してくれた。このアンケートを中心に、その他の先生方のアンケートも交えながら、寿台がどのようにこの連携をとらえていたかをみていく。

連携の鍵を握るのは、子供以前に先生方の反応である。我々は、今回も事前にビデオレターを作成して送り、さらに未来館のチラシ、チケットなどを郵送した。ビデオレターは、子供たちというよりは、むしろ先生方を説得する材料といってよい。実際未来館の展示や、これからワークショップに赴く我々を撮影したものだが、子供たちには今ひとつ実感がわかないようで、常盤先生のアンケートにも「こどもたちには難があったかもしれませんが、大人用として成功です」<sup>36</sup>とある。さらに続けて「唯一残念だったのは、(ビデオの撮影時間が)深夜?で場と雰囲気明るさに欠けていたことです。それだけ多忙の中であったことを私はむしろ感謝ですが、そう取れない人もいます。」何気ないコメントのようだが、実は先生方の反応が必ずしも肯定的なものばかりでないということが、この文章から汲み取れる。同じく「教職員の迎える側としての意識の低さ(=常盤の伝達のまずさ)大変申し訳ありませんでした。本校(=常盤本人)の課題としておきたいと思います。」<sup>37</sup>という言葉もそうした学校内での状況が見て取れる言葉

である。これは、こだま分教室での当初の状況と同じである。

東京実践の経験から、学校の先生方、及び病院との関係にはかなり気を配った。しかし、このように病院と学校の入れ子構造をもつ寿台側に細心の注意を向けた結果、寿台ではおおむねよい評価を得ることができたが、一方で未来館とのコミュニケーションは不足がちになり、実践の現場で摩擦が表面化することになった(こだま分教室での実践は、いろいろありつつも摩擦が表面化する場面はなかった)。

その焦点は、ワークショップの進行であった。ワークショップは本来未来館側の進行に任せることになっていた。しかし、初日のワークショップがはじまって20分程度で、我々が一度ワークショップに介入せざるをえない状況がおきた。ワークショップの導入部分、もっとも大事な「つかみ」の部分での説明が長すぎて、生徒の集中力が切れ始めたと感じたのだ。ワークショップは生徒たちの顔をみながら随時タイミングをはかって行われるため、それ自体は特に問題ないことだと思われた。しかし、これが彼らのプロ意識を傷つけることになった。さらに、1日目終了後の反省会で、今日の反省点を明日へいかす趣旨で、その日の問題点をいくつか指摘したところ、こちらが向こうを「評価」したように思われた。

本質的には、ワークショップの文化の相違と結論付けることができる。科学ワークショップは、あちこちの科学館でみかけられるが、それは科学者の話を聞いたり、実験をして現象を確認するタイプのものが多い。一方今回行うワークショップの目的は冒頭で述べたように、ノー

マライゼーションがひとつの目標であった。すなわち、子供たちとミュージアムスタッフが触れ合うこと、それにより子供たちが科学や社会に興味をもち、闘病意欲にもつなげること。それは科学ワークショップの概念とは根底から異なるものだった。真実を知るといふ科学的発想と、自発的関心や子供たちとのやりとりを重視するワークショップでは、めざす方向性が異なる。ワークショップとひとくちに言っても、それは共同体によって全く異なる文化を持つのだ。その点に関しての摺り合せがしきれないまま見切り発車してしまった我々の非も大きい。

「事前相談の不足だった面があったこと、初回の初日であり、相互（進行と参加者）で場が読み違ったことなどが露見したと思います。後者については当然のことであり、さほど問題は感じませんでしたが、前者については、各所でプロ同士が連携したにもかかわらず不足であったことにこちらも責任を感じました。反省です。」<sup>38</sup>

この言葉は、常盤先生が3つの組織体同士の間  
の違和感を敏感に感じ取っていることを示すものである。「プロ同士が連携したにもかかわらず」とあるが、実は異文化に所属するプロ同士が連携したからこそ、起きた摩擦なのである。とはいえ、初日に常盤先生をはじめ多くの先生方にこのような印象を与えたことは、決して褒められたことではない。実際常盤先生以外の先生方のアンケートにもそれが表われていた。2日目は「とてもよかった」が大多数を占めるの

に比して、初日は「とてもよかった」に丸をつけた先生は一人しかおらず、「よかった」が圧倒的である。実は、この「とてもよかった」と「よかった」の間が、遠慮の入ったワークショップへの評価を測るのにかなり大きな基準になる。

「今回のプログラムでなぜ時間がテーマか?! が、そしてなぜそれについて本校の子供たちと共有体験することに意義があり（したかった）と感じられたのか・・・がもうひとつみえてこなかった。」<sup>39</sup>

実は、これに似たコメントを複数の先生が寄せた。これには二通りの解釈ができる。ひとつは、学校とミュージアムの視点の違いである。ミュージアムはさまざまなテーマに沿ってその都度企画展示を行っている。したがって、今回寿台にこのテーマを持ち込んだのは、それが当時未来館でやっていた展示だから、というしごく簡単な理由による。しかし、学校は前述したように学習指導要領に沿った授業から成り立っているため、そのテーマにも必然性を求められるのである。これは博学連携の際に起こりうる一般的な課題であり、ミュージアムと学校がどちらも感じている悩みであろう。しかし、それだけではない。本質的には「内容が面白いと思えなかった」というメッセージであり、我々はこれを甘受しなくてはならない。ミュージアムスタッフが、通常の館の企画展や、積極的に館のワークショップに参加する客層から聞くことができない率直な、本音の感想だからだ。



### 4.3 プレスの介在と受け手/送り手問題

そうした未来館と我々の齟齬は、地元の新聞に記事が出ることによって、ますます大きなものになった(図1の記事参照のこと)。まず筆者が「科学館」ではなく敢えて「博物館」という言葉を使ったことに対し、事実を正しく伝えていないと未来館のスタッフが反発した<sup>40</sup>。記事がミュージアムスタッフに対し「職員」という言葉を使っていることも、「科学技術スペシャリスト」という肩書きをもつ彼らにしてみれば、腑に落ちなかったのであろう。決定的なのは、記事自体がメルと筆者を全面的にフィーチャーしていることである。

プレスは、「大学院生」が企画した、ということクローズアップすることで、記事のニュース性を高めている。そして、記事の中ではミュージアムという言葉は、(仮に筆者がミュージアムと言ったところで)「博物館」に書き換えられ、「科学技術スペシャリスト」は「職員」に書き換えられる。その証拠に、筆者は「出前博物館」「出前ワークショップ」という言葉を一言も使っていないが、文中に現れている。これらはすべて、新聞が一般市民(=この分野の専門家でない人々)のための媒体であることから、生ずる表記方法なのである。取材にきた信濃毎日新聞は、地元で48万部の発行部数を持ち、長野県民に広く読まれている。このように記事になるにあたって、それは既に未来館とメルのコントロールを離れて、プレスの論理が介在している。それを未来館側に理解してもらうためにも、未来館のスタッフと共に取材を受けなくてははけなかったのだ。

実は、この事件には送り手受け手問題の本質

が潜んでいる。コミュニケーションは、北田がルーマンを引用して言うように伝達の「失効」および理解の「失敗」を契機として捉えるべき

【図1】 信濃毎日新聞 2003年7月30日朝刊

## 松本の養護学校で 「出前博物館」始まる

東大院長らが企画

松本市の寿台養護学校 機に取り組む「メルプロ」で二十九日、子どもたち「出前博物館」を紹介する「出前ワークショップ」が三日間の日程で始まった。東大大学院を拠点に、メディアリテラシー(情報)を主体的、批判的に使いこなす能力の研究や実

「海へ行った」「破合った」高等部の女子生の時間を体験できるなど、一致する年齢に目を立女ができた」などと語り、徒心は「切り株で自分の時間を体験できるなど

「博物館は情報の宝庫」学校との間に新たな回路をつくることで、双方への効果を期待したい」と話していた。

て不思議な気分」と話していた。ワークショップは博物館の活動の幅を広げ、子どもに社会や科学への関心を高めてもらう狙い。企画した東大大学院生の村田麻里子さん(三)は「博物館は情報の宝庫」学校との間に新たな回路をつくることで、双方への効果を期待したい」と話していた。

養護学校の児童生徒が「時間旅行」を楽しんだ出前ワークショップ



ものであり、送り手受け手の解釈の同一性は厳密には起こり得ない<sup>4)</sup>。したがってむしろ「伝達の『失効』・理解の『失敗』」を観察しつつ、たえずその観察された『断絶』を捕い続ける試み—経験的事実としての『失効』を、超越論的な対象としての《不可能な地点=成功》へ向けて、経験的地平において媒介すること—の総体としてコミュニケーションを捉えるべき<sup>4)</sup>なのだ。取材の際に送り手である私の話を、受け手である記者が解釈し、今度はそれを記事の送り手として、受け手である市民を踏まえて構成する。受け手である市民は、そうした情報をさらに自分の中で解釈・構成する。こうした「失

#### 4.4 組織体を抜け出た光景

資本主義経済のグローバル化の中、行政から切り離されていくミュージアムの危機が叫ばれて久しい。関係者の間では、予算削減、来館者減少などを踏まえてその問題の所在がさまざまに議論されてきた。しかし、ミュージアムという組織の構造をよりメタレベルで考えていかなければ、本質的な問題は見えてこない。要因のひとつは、ミュージアム（それぞれの行政的枠組みのいかんにかかわらず）が歴史的にも組織的にも極めて権力的で啓蒙的な装置だという点である<sup>4)</sup>。ミュージアムは以前に比べてワークショップやアウトリーチがふえたことで、社会に対して開かれつつあると思われるがちである。しかし、それでもなおミュージアム活動は、社会教育を中心とした啓蒙的な枠組みの中で行われていることに変わりはない。学校で行う移動博物館も、館内で行うギャラリートークも、権力的かつ啓蒙的な関係性が成立した中で行われ

効」と「失敗」の繰り返しの中で、それでもなお《不可能な地点=成功》を目指しつつ、コミュニケーションは行われる。

このことは、なにもメディアによる送り手受け手の問題だけに限ったことではない。むしろ今回の実践のような異文化コミュニケーションを考える上でも有効な示唆といえる。ミュージアム、病院、養護学校、プレスという強度の組織体質が対峙したとき、そこに生まれるコミュニケーションは、伝達の「失効」からしかスタートしえない。言い換えれば、幾重にも重なる受け手送り手構造の中に、この実践全体が位置づけられるということである。

る。

今回の実践は、長野の養護学校という全くの異空間に移動することにより（生徒たちがミュージアムに来館するのではなく）、そうした授業という装置やカッコイイ施設や部署内での肩書きといった枠組みを全く取り払ってしまう野蛮な環境に、ミュージアムスタッフが放り込まれる形となった。したがって、上記にあげた例をはじめとする数々の摩擦は、まさに異文化コミュニケーションを通じて組織体が揺さぶられ、構造の一部が現れたことを示しているのである。常盤教諭がいみじくも「利害関係ともいえる『教師—生徒』の関係の前に、相互に『自己開示』を促し、『自分を出していく環境』『自分を見つめられる・・・環境』作りを心がけています。」<sup>4)</sup>というコメントを残しているが、異文化コミュニケーションは、組織レベルでも個人レベルでも、そうした「自己開示」を求めつづけ

るのである。自分を包む組織体の中からふと窓の外に目を向けてみれば、そこには全く異なる

光景が広がっている。

## 5. さいごに：エスノグラフィを越えて

ホスピタルリーチ・プロジェクトは、ミュージアムと病院というふたつの組織をつなぐことを通じて、それぞれの組織と社会との関わりを検討することを目的とした。異文化コミュニケーションによって組織に身体化された知や価値体系を異化させ、その可能的様態について検討を加える第一歩に取り組んだ。具体的な実践内容としては、ミュージアムスタッフが我々のファシリテートのもと、病院あるいは院内教育機関という空間に出向き、そこでワークショップを行うというきわめてシンプルなものであるが、それを実現していくプロセスは困難を極め、ミュージアム及び病院両者にとって実に本質的な問題をいくつも含んでいた。結果としてホスピタルリーチ・プロジェクトは、ミュージアム、病院、学校、大学、プレスという組織の価値観が衝突し、せめぎあう、どろどろとした場をつくることになった。いいかえれば、こうしたプロセスは、それぞれの組織体の社会構造を浮かび上がらせるきっかけをつくるのである。今回不十分ながらも紹介したいいくつかの例は、そんな氷山の一角にすぎない。

このようにしてみると、今回の実践研究は、組織のエスノグラフィであると同時に、従来のエスノグラフィを越えた側面をもつ。すなわち、ただ対象を観察し、あるいは対象と自らの関係を見極めているだけでは、こうした組織体の体質は浮かび上がってこない。それは「つなぐ」

というプロセスの中で、組織体同士が摩擦と衝突を繰り返すからこそ露呈する。そして、そうした実践がベースになっているからこそ、今後何をどうしていかななくてはならないかという改善への方向性がはっきりと見えてくるのである。ミュージアムが危機から巻き返しをはかろうとするとき、病院のQOLや閉鎖性が問題となるとき、大学が象牙の塔と揶揄されるとき、こうした実践を通してみえることが、解決への道しるべとなる。メディア・プラクティスは、こうした現場の抱える問題を見据え、それに対し何らかの変化（たとえ結果として微細なものであっても）をもたらそうと思考錯誤を繰り返す作業である。こうした作業を続けていくことこそ、社会のダイナミズムを捉えていく研究が可能なのではないだろうか。

異文化をもつ組織同士をつなぐホスピタルリーチはまた、大学という組織を背負う自分に跳ね返ってくる。自ら「つなぐ」という行為を仕掛ける今回のような実践では、筆者はミュージアムや病院をただ遠くから眺めて批判する傍観者でいることはできない。その中に身を投じ、ミュージアムや病院関係者ともども戸惑い、悩み、ときに腹をたてあう。自らの立ち位置とそれによって出来上がる関係性を受け入れ、かつそれに対処していくことが求められる。その中で、自分が所属する大学という組織の問題点を真摯に受け止めていかなくてははいけない。今回はきちん

と触れることができなかったが、大学という組織体に筆者が属していることも、このプロジェクトの本質的な課題のひとつなのである。大学という組織が社会とつながり、実践的な研究をしていくことの意義と可能性について、これからいっそう本格的に見ていく必要がある。

同時に本研究の最終目標である組織（特にミュージアム）の可能的様態の検討を、今後も続けていかななくてはならない。組織のエスノグラフィ研究は途についたばかりである。

さいごに本研究に関わってくださった多くの

方々、東京都立北養護学校東大こだま分教室の土屋忠之先生、吉田譲先生、東大総合研究博物館の西野嘉章先生、佐々木猛智先生、長野県寿台養護学校の常盤貞夫先生、塚原明水校長先生、日本科学未来館企画開発室展示企画グループの小川陽子氏、島田卓也氏、野村みどり氏（所属・肩書きはすべて当時のもの）に心からの感謝を送りたい。さらに、内輪ではあるが、共にこのプロジェクトを共有してくれた塚瀬三重、林直哉、境真理子、水越伸にもこの場を借りてお礼を言いたい。



村田麻里子（むらたまりこ）

1974年生まれ。東京大学大学院学際情報学府博士課程（現在も在籍中）  
[専攻領域] メディア論、博物館学  
[著書・論文] 「来館者研究の系譜と課題：日本における博物館コミュニケーションのための一考察」『日本ミュージアムマネジメント学会研究紀要』第7号2003年3月 pp95-104  
「博物館とメディア・リテラシー：東京都写真美術館における鑑賞と表現をめぐる実践的研究」『東京大学社会情報研究所紀要』第65号2003年 pp37-67水越伸と共著  
「Reconceptualizing Museum Communication: A Call for Media Studies」The Bulletin of the Institute of Socio-Information and Communication Studies, The University of Tokyo Vol.66, 2004, pp77-95.  
[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程・京都精華大学人文学部社会メディア学科専任講師  
[所属学会] ミュージアムマネジメント学会、マスコミュニケーション学会

## 註

- (1) ここで「閉じた」組織とは、外界との接触が少ない、一般社会との交流が少ない、といった状況をさす。病院はもちろんのこと、専門性の強いミュージアムも、ある意味で「閉じた」組織といえる。
- (2) QOLの定義は実にさまざまだが、身体的・社会的・心理的に良好で、病気にもかかわらず生きる意欲をもてるような状態を目指すという点で一致している。
- (3) プロジェクトの概要や実施内容の詳細に関しては、表1を参照のこと。
- (4) 病院内あるいは病院に隣接する教育機関。法的枠組みはさまざま、養護学校の分校や分教室、小・中学校の特殊学級などがある。病弱養護学校は、たいがい医療機関に隣接・併設されている。また、知的障害養護学校や肢体不自由養護学校が院内に分校や分教室を設けているケースがある。さらに、病弱・身体虚弱特殊学級というものがある。これは院内に設置されているものと、一般の小中学校内に設けられていて、生徒が通うものがある。
- (5) ホスピタルリーチはメルルのサブプロジェクトにあたり、東京大学大学院情報学環メルプロジェクトの平成14年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）循環型情報社会の創出を目指した協働的メディア・リテラシーの実践と理論に関する研究 課題番号14310071（代表 水越伸）によって実現した。
- (6) 詳細は、<http://mell.jp/>
- (7) 水越伸『メディア・プラクティスの地平』『メディア・プラクティス』水越伸・吉見俊哉編、せりか書房、2003において、メディア論の動向を俯瞰しながらメディア・プラクティスの意味するところや位置付けを詳しく述べている。
- (8) *ibid.*, 44
- (9) クリフォード・ジェームズ、毛利嘉考ら（訳）『ルーツ：20世紀後半期の旅と翻訳』月曜社、2002 Clifford, James *Routes, Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Cambridge Mass. and Harvard University Press, 1997/クリフォード・ジェームズ、太田好信ら（訳）『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院、2003 Clifford, James *The Predicaments of Culture: Twentieth Century Ethnography, Literature and Art*, Harvard University Press, 1988.
- (10) スピヴァック・ガヤトリ、上村忠男・本橋哲也（訳）『ポストコロニアル理性批判：消え去りゆく現在の歴史のために』月曜社、2003./Spivak, Gayatri Chakravorty *A Critique of Post Colonial Reasons: Towards a History of the Vanishing Present*, Cambridge Mass. and Harvard University Press, 1999. スピヴァック・ガヤトリ、上村忠男（訳）『サブアルタンは語るができるか』みすず書房、1998. Spivak, Gayatri Chakravorty *Can the Subaltern Speak?* In *Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press, 1988
- (11) 村田麻里子『博物館のコミュニケーション論的転回—来館者研究の再構成—』東京大学大学院学際情報学府、2001年度修士学位論文/水越伸・村田麻里子「博物館とメディア・リテラシー：東京都写真美術館における鑑賞と表現をめぐる実践的研究」『東京大学社会情報研究所紀要』第65号2003年 pp37-67 /Murata, Mariko 'Reconceptualizing Museum Communication: A Call for Media Studies' *The Bulletin of the Institute of Socio-Information and Communication Studies*, The University of Tokyo Vol.66, 2004, pp77-95など
- (12) たとえば以下を参照。梅棹忠夫『メディアとしての博物館』平凡社、1987/同『梅棹忠夫対談集—知的市民と博物館』平凡社、1991/Hooper-Greenhill, Eilean(ed) *Museum, Media, Message*, Routledge, 1995/Silverstone, Roger 'Museums and the media~A theoretical and methodological exploration', *The International Journal of Management and Curatorship* 7, 1988, pp.231-241/Silverstone, Roger 'The museum is the medium: on objects and logics in times and spaces', *Towards the Museum of the Future~New European Perspectives* Routledge, 1994
- (13) ミュージアムをメディアであると述べている論文はそのほか沢山あるが、その意味するところには温度差があり、多くの場合装飾的に使われている。
- (14) 詳しくは、松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2003を参照されたい。
- (15) 水越がメディアの「あり得たかたち」として使用するこの言葉を、ミュージアムの「あり得たかたち」に応用して使用する。
- (16) キボンズ・マイケル、小林信一（監訳）『現代社会と知と創造—モード論とは何か』丸善、1997



- (17) 水越伸「メディア・プラクティスの地平」『メディア・プラクティス』水越伸・吉見俊哉編、せりか書房、2003、P39
- (18) ウェンガー・エティエンヌ、マクダーモット・リチャード、スナイダー・ウィリアムM『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社、2002 Wenger, Etienne McDermott, Richard Snyder, William M. *Cultivating Communities of Practice* Harvard University School Press, 2002, p40
- (19) コレクションは保存を名目に公開を渋ることも多く、ワークショップやアウトリーチ活動がさかんになったいま、改善はされつつあるが、こうした文化はいまだに健在である。また、大英博物館をはじめ多くの西洋のミュージアムがエジプトその他の旧植民地圏にコレクションをかえさない言い訳として保存に最適な設備が整っていることを強調する。ホスピタルリーチは、また、漠然とした「パブリックのため」という魔法の言葉に安住する博物館に対して疑問符を投げかけるプロジェクトでもある。いったいパブリックとは誰なのか。そこからこぼれおちる無数の人々や共同体のひとつが、患者や病気療養児のそれである。
- (20) のちに本文で詳しく述べるが、塚瀬は、治療と延命が優先されることによってQOLがおおざなりになっている病院の現状を目の当たりにし、ホスピタルリーチをそうした状態への改善策として提案した。
- (21) ウェンガー・エティエンヌ、マクダーモット・リチャード、スナイダー・ウィリアムM『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社、2002 Wenger, Etienne McDermott, Richard Snyder, William M. *Cultivating Communities of Practice* Harvard University School Press, 2002, p40 コミュニティ・オブ・プラクティスとは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」と定義され、本書は「太古の昔から続く、知識を核」とした社会的枠組みに、「組織がより意図的かつ体系的に知識を経営に生かすこと」という視点を加えたビジネス書である。ビジネス業界独特の楽観的な論調は、実際の異文化交流には通用しない場合が多いが、組織論の観点から、組織の特質を考えるうえで参考になる記述は多い。専門知をどう共有するかという学習理論の観点からも注目を浴びている。
- (22) 表1を参照。また実践内容の詳細は、村田麻里子「ホスピタルリーチ・プロジェクト：博物館と院内学級をつなぐ試み」『ウロボロス東京大学総合研究博物館ニュース』Vol.8 No.1 2003年7月 pp10-14を参照されたい。
- (23) 北養護学校は、肢体不自由養護学校である。こだま分教室は1996年から、東大病院に分教室として設置された。同様に、1993年には心身障害児総合医療療育センター内には同校の「けやき分教室」が設置されている。
- (24) 原則として小学生から高校生までの体育の実技を除く全教科を教えるが、実質的には十分な授業時間数の確保は難しい。なお、こだま分教室の体制や行事については、塚瀬三重『博物館資源を活用した障害支援プログラムの提案—「ホスピタルリーチ」プロジェクト』2002年度東京大学大学院学際情報学府修士学位論文にまとめられているのを参照されたい。
- (25) ミュージアムが現在有す回路は限定されており、本来なら多様なコミュニティや層との関係性を構築していくことは、最重要課題である。そうしたさまざまなコミュニティとの回路作りを進めるべく、筆者は塚瀬らとともにシニアのワークショップなども手がけている。
- (26) 厳しい財政難から、そのアカウントビリティを果たすために、博物館は以前にもまして教育という役割を重視しなければならなくなった。そのために、特にイギリスとアメリカのミュージアムエデュケーションの事例を積極的に紹介し、かつ来館者数大幅増に直結するため、学校の団体見学も増えている。
- (27) 現在の学校のしくみでは、総合的な学習の時間か、関連のある理科や社会の授業のみである。そのほかには、修学旅行や社会科学見学があるが、博物館が学校の中に入っていくという場合は授業枠以外にはほとんどない。
- (28) 当然、病気療養児や障害者の身に実際起きうることである。筆者はイギリスで学習障害（主にダウン症、自閉症）の子供たちをサポートしたことがあるが、彼らと外に出かけると、しばしこのような場面にしばし遭遇した。しかし、それとてある程度は必要なコミュニケーション過程の範囲である。知らないことは、何より差別へと直結する。ハンセン病などが「隔離政策」によって偏見の溝が深まったことなどに鑑みれば、こうした反応も、相互理解への一歩である。とはいえ、身内がこれを実施することはつらいのも事実だ。だからこそ、こうした外部が出来ることのひとつである。
- (29) 世俗の世界から遮断された不可侵の聖なる場所。日本では網野善彦の示した概念が知られている。

- (30) インタビューの中でも、普段のやりとりからも、病院に対する直接的な苦言は先生方からはほとんど聞かれなかった。これはむしろ、なにげない事実や発言から我々が構造的にから感じ取ったことである。
- (31) こだまの時間担当の3人の教員とのフォーカスグループより。
- (32) 我々の印象は東京実践2回目の際の吉田教諭のインタビューより裏付けられた。
- (33) ミュージアムには「受身で、敷居の高そうなどころというイメージがあった」ことが1回目のフォーカスグループでも語られている。
- (34) Tシャツ作りは授業という観点からするとおまけだが、ミュージアムではこうしたお土産が大切なファクターなのである。子供たちも嬉々として取り組み、教員の一人からも「早速オリジナルTシャツを着てきた子供もいて、楽しさが後日にも続いています」というコメントをもらった。
- (35) 寿台の職員や教員の子供も参加しており、実際にはもう少し人数は多い。
- (36) 「事前にご用意したビデオレターやチラシ、チケットなどを含め、今回のプログラム全体に関して感じたことをお聞かせください」という質問に答えて。
- (37) 「その他感想など自由にお書きください」という項目に答えて。
- (38) ワークショップが（とてもよかった・よかった・どちらでもない・あまりよくなかった・よくなかった）の項目を選び、その理由及び、良い点・改善点を聞く項目に答えて。
- (39) (38)の続き
- (40) 現在の日本の博物館法に従えば、日本科学未来館は、「博物館」という分類には入らない。定義によると、「博物館」はコレクションがなくてはならないが、未来館はコレクションを持たない。したがって、厳密には「科学館」という定義になる。しかしホスピタルリーチ自体は、科学館ではなく博物館を射程とした実践であり、筆者はそうした言葉の矮小化を避けたかった。同時に、果たしてコレクションがなければ博物館は成立しないのかについても、考えていかななくてはならない。
- (41) 北田暁大「ヴォルター・ベンヤミン—反メディア論的考察—メディア論の文体をめぐる」『メディア・スタディーズ』吉見俊哉編 せりか書房、2001、pp84-97
- (42) *ibid.*, p87
- (43) たとえば以下を参照されたい。金子淳『博物館の政治学』青弓社、2001／松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2003／ブルデュール・ピエール他、山下雅之（訳）1998『美術愛好—ヨーロッパの美術館と観衆』木鐸社Bordieu Pierre et al. *l'amour de l'art*, Editions du Minuit, 1966／Bennett, Tony, 1995 *The Birth of the Museum: History, Theory, Politics*, Routledge
- (44) 「子供と接するにあたり、先生ご自身心がけていらっしゃることは何ですか。」という問いに答えて。

## 参考文献

- ウエンガー・エティエンヌ、マクダーモット・リチャード、スナイダー・ウィリアムM『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社、2002. Wenger, Etienne McDermott, Richard Snyder, William M. *Cultivating Communities of Practice* Harvard University School Press, 2002. p40
- 梅棹忠夫『メディアとしての博物館』平凡社、1987
- 梅棹忠夫『梅棹忠夫対談集—知的市民と博物館』平凡社、1991
- 金子淳『博物館の政治学』青弓社、2001
- 北田暁大「ヴォルター・ベンヤミン—反メディア論的考察—メディア論の文体をめぐる」『メディア・スタディーズ』吉見俊哉編 せりか書房、2001
- クリフォード・ジェームズ、毛利嘉考ら（訳）『ルーツ：20世紀後半期の旅と翻訳』月曜社、2002 Clifford, James *Routes, Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Cambridge Mass. and Harvard University Press, 1997
- クリフォード・ジェームズ、太田好信ら（訳）『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院、2003 Clifford, James *The Predicaments of Culture: Twentieth Century Ethnography, Literature and Art*, Harvard University Press, 1988
- 塚瀬三重『博物館資源を活用した関病支援プログラムの提案—「ホスピタルリーチ」プロジェクト』2002年度東京大学大学院学際情報学府修士学位論文
- 塚瀬三重・三河内彰子・村田麻里子「活動報告：求ム！熱シタ想像力！—シニアのための超おとなワークショップを振り返る—」『ウロボロス東京大学総合研究博物館ニュース』Vol.9 No.1 2004、pp6-9
- スピヴァック・ガヤトリ、上村忠男（訳）『サブアルタは語るができるか』みすず書房、1998. Spivak, Gayatri Chakravorty *Can the Subaltern Speak? In Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press, 1988
- スピヴァック・ガヤトリ、上村忠男・本橋哲也（訳）『ポストコロニアル理性批判：消え去りゆく現在の歴史のために』月曜社、2003. Spivak, Gayatri Chakravorty *A Critique of Post Colonial Reasons: Towards a History of the Vanishing Present*, Cambridge Mass. and Harvard University Press, 1999
- フーコー・ミシェル、渡辺守章（訳）『性の歴史 I 知への意志』新潮社、1986 Foucault, Michel *La volonté de savoir (Histoire de la sexualité, Volume 1)* Edition Gallimard, 1976
- フーコー・ミシェル、田村淑（訳）『狂気の歴史—古典主義時代における—』Foucault, Michel *L'Histoire de la folie à l'âge classique* Edition Gallimard, 1972.
- ブルデュール・ピエール他、山下雅之（訳）1998『美術愛好—ヨーロッパの美術館と観衆』月曜社Bordieu Pierre et al. *l'amour de l'art*, Editions du Minuit, 1966
- 松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2003
- 水越伸・吉見俊哉編『メディア・プラクティス』せりか書房、2003
- 水越伸・村田麻里子「博物館とメディア・リテラシー：東京都写真美術館における鑑賞と表現をめぐる実践的研究」『東京大学社会情報研究所紀要』第65号2003、pp37-67
- 村田麻里子『博物館のコミュニケーション論的転回—来館者研究の再構成—』東京大学大学院学際情報学府、2001年度修士学位論文
- 村田麻里子「ホスピタルリーチ・プロジェクト：博物館と院内学級をつなぐ試み」『ウロボロス東京大学総合研究博物館ニュース』 Vol.8 No.1 2003年7月 pp10-14
- 横田雅史（監）全国病弱養護学校長会（編）『病弱教育Q&A Part I 病弱教育の道標』ジアース教育新社、2001
- 横田雅史（監）全国病弱養護学校長会（編）『病弱教育Q&A Part II 新しい就学基準「自立活動」の事例「総合的な学習の時間」の事例』ジアース教育新社、2002
- Bennett, Tony, 1995 *The Birth of the Museum: History, Theory, Politics*, Routledge
- Hooper-Greenhill, Eileen(ed) *Museum, Media, Message*, Routledge, 1995
- Karp Ivan, Kreamer Christine, Lavine Steven 1992 *Museum and Communities, The Politics of Public Culture*,

Smithonian Institution Press

- Murata, Mariko 'Reconceptualizing Museum Communication: A Call for Media Studies' *The Bulletin of the Institute of Socio-Information and Communication Studies, The University of Tokyo* Vol.66, 2004, pp77-95
- Silverstone, Roger 'Museums and the media~A theoretical and methodological exploration', *The International Journal of Management and Curatorship* 7, 1988, pp.231-241
- Silverstone, Roger 'The museum is the medium: on objects and logics in times and spaces', *Towards the Museum of the Future~New European Perspectives* Routledge, 1994

【表】ホスピタリティー実践表

実践日	2002年12月19日	2003年7月3日・23日	2003年7月29日・30・31日
連携先	東京大学総合研究博物館 東京都立北豊饒学校東大こだま分教室	東京大学総合研究博物館 東京都立北豊饒学校東大こだま分教室	日本科学未来館 長野県寿台養護学校
院内教育機関の種類	肢体不自由養護学校の分教室(院内学級)	肢体不自由養護学校の分教室(院内学級)	病弱養護学校
実施枠組み	こだまの時間 (2コマ分)	こだまの時間 (2コマ分)	学校開放日 (午前中)
内容	<p>【ステップ1】：西野先生によるギャラリートーク「ダイヤモンドってなんだろう? : 文化と環境の視点からその魅力を探る」</p> <p>【ステップ2】：ワークシート1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今日は何で知ったことを書いてみよう</li> <li>・好きなダイヤモンドはどれ? (好きなものを選び、写真をとる・名前をつける・なぜ選んだのかを書く)</li> <li>・おまけ：ダイヤと写真をとろう!</li> </ul> <p>【ステップ3】：(時間外) ワークシート2を用いた調べ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイヤモンドが地面に埋まっている様子を絵にしてみよう</li> <li>・ダイヤモンドは何に使われているだろう。沢山書いてみよう</li> <li>・ダイヤモンドを宣伝するポスターを書いてみよう</li> <li>・ダイヤモンドがとれる地域に印をつけよう</li> </ul>	<p>【第1回目】 新聞記者になったつもりで員の研究をしている佐々木先生を取材し、記事を書こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐々木先生の語</li> <li>・記者による質疑応答・インタビュ</li> <li>・記事の構想を練る (記事の内容、レイアウト、とりたい写真)</li> <li>・新聞の構成 (こどもたちでレイアウトを話し合う)</li> <li>・新聞はのちに張り出し・配布される</li> <li>・ワークシート (兼調査シート)</li> </ul> <p>【第2回目】 員のオリジナルTシャツをつくらう!</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気に入った員をコレクションから選ばう。</li> <li>・Tシャツのデザインを考えよう。</li> <li>・員をスケッチして、絵の具で色をつけよう。</li> </ul>	<p>【第1日目】：企画展示「時間旅行展」の案内。切り株、貝のから、地層など、可視化された時間 (時間が目にプロセスとしてみえていること) を体験する。自分の時間を切り株の年輪で刻んでみて、人と共有する。</p> <p>【第2日目】：時間の錯覚を体験する。残像現象をもちいたフリップブック作り。</p> <p>【第3日目】：精神テンポを体験する。ビートマシンを用いて心拍・呼吸・歩行速度など個人の中の「ビート」を可視化したり、聞き合う。朗読ゲームにより、流れた時間を予測しよう。</p> <p>* WSの様子は、松本病院内にも展示された。</p>
評価方法	観察記述・生徒を対象としたアンケート調査 (ワークシート埋め込み型) ・教員を対象とした事後アンケート調査とフォークス・グループ	観察記述・生徒を対象としたアンケート調査 (ワークシート埋め込み型) ・教員を対象とした事後アンケート調査とフォークス・グループ	観察記述・教員や日本科学未来館スタッフらとのフォークス・グループ、生徒および教員を対象とした事後アンケート調査



# Ethnography of the Hospital-reach Project: Creating cross-cultural communication among institutions

Mariko Murata

What makes an institution, an institution? What kind of structure does it have, and how does it influence the society? Media studies have dealt with this issue for a long time. This paper will outline an experimental project which observes the above question through connecting museums and hospitals-- both notoriously rigid institutions. This linkage is made through the process of designing and coordinating an outreach program of which museum staffs convey inside hospitals or hospital schools. Thus the 'Hospital-reach Project' is a cross- cultural communication project which intends to open up such 'closed' institutions. When trying to make linkage with society or with other institutions, norms which constitute the institutions often collide and unveil. By looking at three case studies from an ethnographical approach, the paper will examine the difficulties and necessities of cross-cultural communication.

---

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

Key Words : Cross-cultural communication, social linkage, institution, museum, hospital